

27 特殊なニーズのある子どものきょうだいを対象としたグループワークの開発と評価：未就学児期および中・高校生期

研究所 障害福祉研究部 北村 弥生

沖縄県立看護大学 上田 礼子

【目的】 特殊なニーズのある子どものきょうだいは、親の注意を引きやすいこと、社会からの差別、情報不足による不安、親亡き後の後見など多様な課題をかかえる場合がある。学童後期のきょうだいを対象にしたグループワークにより、これらの特殊な経験や感情や対処方法を交換することで予防的効果があることをすでに実証したが、きょうだいの課題は幼児期にすでに母親に気づかれており、中・高校生期に最も深刻であることが成人したきょうだいから指摘されている。そこで、未就学期きょうだいと中・高校生きょうだいを対象としたグループワークを開発し評価することを目的とした。

【方法】 1) 未就学期きょうだいについては所沢近隣の特別支援学校と就学前通所施設に募集要項を郵送し、2週間間隔で2回、平日に昼食をはさんだ4時間のグループワークを実施した。母親ときょうだいの遊び体験、母親同士の交流、障害に関する話しのきっかけ作りを目標とし、ゲームの他、2回目には障害のあるきょうだいをテーマにした紙芝居を視聴したが、意見交換にはいたらなかった。そこで、約半年後に3回目を実施し、持参した家族の写真を装飾し、家族構成員のよいところ、悪いところを発表しあった。開始前と2回目終了後に母親を対象に質問紙法による調査を行った。

2) 中・高校生期きょうだいについては過去に発表者が主催した学童期きょうだい向けグループワークへの参加者のうち該当年齢の28名に募集要項を郵送した。参加者に深刻な課題があるか、どのような支援が必要かを見極めることを目的とし、1週間間隔で2回、週末に昼食をはさんだ5時間のグループワークで、1回目は屋外での冒険活動を、2回目には成人きょうだいとの質疑応答を準備した。応募は1名であったため、電話とメールにより不参加理由をたずねたところ、クラブ活動・私的な活動・試験などで日程があわないことと、今は学校に集中したいこと、母親とのコミュニケーションがうまくいかないことがわかったため、日程を変更し、対象年齢を小学校5年に下げて延べ9名の参加者を得た。各回の終了後に参加者を対象に質問紙法による調査を行った。

【結果】

1) 未就学期グループワーク参加者は全員が自閉症圏の子どものきょうだいであり、3つの目標は達成されたことが調査の結果明らかになった。母親が具体的な課題を感じていたが対処機会を欠いていたため、特に母親同士の交流が高く評価された。

2) 中・高校生期きょうだいでは参加者を得るのが難しく、深刻な課題は提出されなかった。また、参加者の自己概念、きょうだいへの意識得点は学童期よりも高かった。これは、学童期のグループワークと家庭での配慮の結果であると推測された。成人きょうだいへの質問は各参加者とも5つ以上の質問を準備し、疑問が解決した効果はあったと評価された。